スーパーヒーローアカデミアタイム

ウィッシングブラックキャットレイダー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時代を駆け抜けた数多のヒーロー達。

彼らの生き様は子供たちに希望を、勇気を与えてきた。

今、その思いを胸に一人の少年がヒーローへの道を歩む！

祝え！新たなるレジェンドの誕生を！

目次

第1話　アカデミア2XXX　――　1
第2話　英・雄・原・点　――　4
3話　競走・イクサ・フィストオン
8

第1話　アカデミア2XXX

『あ、あ～。カメラ撮れてる？』

場所は雄英高校の会議室。

右を見ても左を見ても、プロヒーローがいる。

しかし、そこには重苦しい空気感が漂っていた。

原因は単純明快、唐突に送られてきた一本の動画。

その送り主は突如として消えた四人の生徒の一人、ヒーロー科1年A組　生平瞬（なまひら しゅん）

『ま、大丈夫でしょう！そんなわけで先生方お元気ですか？そちらはいろいろ大変でしょう。急に生徒が消えたりして』

動画の中で他の三人を従え、ゴテゴテの装飾の付いた椅子に座った少年が語る。

その一言一言にまた空気が一段と重くなる、しかし会議室にいる誰も声を発さない。

異様な雰囲気の中、動画は流れ続ける。

『さて、本題に移りましょう。今回、この動画を送った理由は二つあります。』

動画の中の全員が腰に巨大な腕時計のような白いベルトを着け、椅子に座っている少年がまるでこちらに見せるがごとく懐中時計のようなものを手にしたまま、告げる。

『一つ目は、我々は雄英高校を辞める。この動画は退学届の代わりとでも思ってください』

会議室は一瞬の間騒然となった。

だが、続く言葉に皆が息をのんだ。

『二つ目は所謂、宣戦布告ってやつです』

時は遡り、数か月前。

場所は同じく会議室。

そこでは、一般入試の合否を決めるべく教師陣が話し合っていた。

「救助（レスキューポイント）Ｐ無しで７７点、筆記も高得点。態度は多少アレですが、とても優れたタフネスと個性を持っている。まさに将来有望と言えますね」

「それに、敵（ヴィランポイント）Ｐ０点で８位か。今年の新入生はなかなかのモンだな」

「なら、７位のリスナーはどうよ！なかなかＣＯＯＬな鎧みたいなの着ちゃってよ！」
「まぁ、何はともあれ、優秀な子が多いことはいいことさ！じゃあ、クラス分けに移ろうか…」

そして、時は立ち四月。
誰もが胸に期待と不安を抱き、特徴的なＨ型の校舎に向けて足を進める。
ある者はＮｏ．１になるために、ある者は最高のヒーローになるために。
また、ある者はかつて見たレジェンド達のようになるために。
彼らはどのような道を選び、歩むのか。
今言えることはただ一つ。
祝え！新たなるレジェンドの始まりを！

第2話　英・雄・原・点

人は誰しも自分自身の中に理想の英雄(ヒーロー)を持つ。
それは、オレ――生平瞬　も同じだ。
幼い頃に見たあのヒーロー達のようになりたい。
それこそが自分の原点(オリジン)。
ただただその心のままに今の今まで生きてきた。
そして、今雄英高校の門の前に立っている。
別に雄英である必要はなかった。けれどここならなにか新しい視点を新しい価値観を、自分とは違う想いを見つけられるかもしれない。見つけたところで自分自身の理想は変わりはしないし歩みを止めるつもりもない　。
それでも無意味無価値では無いはずだ。
この門をくぐる時、それは新たな歴史の一ページが記される時。
「・・・オレ、参上」
勇気をくれる言葉(カッコイイ決めゼリフ)と共に、門の中へ今、足を踏み入れる。

いざ鎌倉ならぬいざ教室と向かった先には、何やらブツブツと呟きながら突っ立っている少年一人。
声をかけるか少し迷ってやっぱりやめて後ろのドアから教室へ。
少しばかりの視線と共に自分の席へ向かう所に声をかけられた。
「よう！俺は上鳴電気。お前は？」
「生平瞬だ。よろしく」
「ところで、前扉のアレ、お前の知り合いとかじゃないよな？」
「いや、全くの他人だよ。だけどそろそろ来ると思うぜ、時間的に」
軽く言葉を交わして席に着く。
近くにいるのは、爆発ヘッドと中に浮かぶ制ふ・・・え？
「制服が・・・浮いてる・・・だと」
つい言葉を漏らすと、
「ん？あぁ、私葉隠透っていうの。個性派見た通り透明！よろしく」

「そ、そうか。オレは生平瞬だ。こちらこそよろしく」
挨拶を交して前を向けばいつの間にやらあのブツブツ君も教室へ入ってた、と思えばいつの間にやらその後ろから寝ぶくろが・・・
なにやら、入学式を放ってテストをするらしい。
いや、いくら校風が自由だからって限度ってもんがあるのでは・・・
そんな思いも天には通じず、グラウンドへ集合と。
拝啓、両親そして、友人たちへ
この学校、教師も同級生も校舎もなにもかも濃すぎるんですが何とかなりませんでしょうか。
オレは、この学校でうまくやって行けるのでしょうか。
敬具

唐突に始まった個性把握テスト。
生徒の言葉にイラつかれたのか、最下位のヤツは除籍処分だと。

マックで談笑なんとやらって、この辺にマックはなかったと思うのですが。
でも、決まったものはしょうがない。
ただ、プロヒーローになるだけなら簡単に出来るだろう。
免許をとって、事務所に入るなり独立するなりすればいい。
しかし、己自身の理想の英雄（ヒーロー）になる事は簡単ではない。
理想への道というのは辛く、苦しく、険しい道であろう。
だけれども、この歩みを止めることは出来ない。
あの日見た理想（彼らの勇姿）に近づくために。
今より、オレの英雄邁進歴は幕を開ける。

その前に敬愛なる我が両親へ、今日のために高いカメラまで用意していたのに入学式出れなくてすまない・・・。いや、マジで。

3話　競走・イクサ・フィストオン

我がクラス1年A組は、入学式もガイダンスもすっぽかし先生の命によりグラウンドに集まった。

今から始まるのは個性把握テスト。要するに個性ありでの身体測定。

しかし、「生徒の如何は教師の自由」の言葉と共に出された最下位になれば除籍するという言葉。

単純な身体能力を測るというなら、まぁオレの最下位はまずないだろう。

何故ならオレにはレジエンド（ヒーロー達）の力があるから。

この力があれば、早々負けることは無い。

だけれども、驕ってはいけない。

なぜならこの力は、オレ自身の力ではないのだから。

第一種目　５０メートル走

「次、葉隠と生平」

相澤の言葉と共に二人がスタートラインにつく。

一人は顔の見えない、いや体が見えない透明人間。

そしてもう一人は、腰に変なベルトを巻いた男子。

透明人間はスタートラインにつくや否や、クラウチングスタートの形をとる。

それに対して、ベルトを巻いた男子はその場に立ったまま右手にどこかから取り出した拳のようなもの（イクサナックル）を持ち、その先端を左の掌にあてる。

それと同時に『レ・ディ・ー』という電子音が彼の持つイクサナックル（拳のようなもの）から流れる。

その音につられのか周りの視線が彼に集まる。

そんな中、周りの視線など気にも留めないように一言だけ言葉を発す。

その言葉は、彼が見てきたレジエンド（ヒーロー達）が戦う決意や覚悟と共に幾度も何度も口にしてきた言葉。

そして、その少年にとっては無限の勇気と強さをくれる魔法の言葉。

決して大きくはない。だが、その場の全員に聞こえるほどの力強い声で言う。

「変身」

その言葉と同時に右手に持っているイクサナックル（拳のようなもの）を腰のベルトに装着する。

すると、ベルトに装着されたイクサナックル（拳のようなもの）から『フィ・ス・ト・オ・ン』の電子音声とともに聖職者の法衣のような白い鎧が現れ、少年の体にかぶさるように装着される。

そして、鎧をまとった少年が走る体制をとると直ぐに《ＳＴＡＲＴ！》と開始を告げる音がした。

イクサを纏って、腰を落とす。右手のスナップも忘れずに。

そして、スタートの合図とともに走り出す。

当然だが、生身より遥かに速い。

みるみるうちに近付いてくるゴールラインと計測ロボ。

突っ切った時に聞こえた記録は、４．２６秒。

なかなかの好記録であり、身体への負担もまだそれほどかかっていない。

この調子で行けるなら、このテスト負ける気がしねぇ！

尚、この後すぐに体からバイクを出されてインパクトも記録も抜かれた。

第二種目　握力測定
握力を凡そ２０倍にするハンティング・グラブのおかげで７６０ｋｇ。
尚、万力を体から出されて負けた。

第三種目　立ち幅跳び
記録２４．８ｍ
尚、爆風で飛び続けたり体を浮かされたりして負けた。

第四種目　反復横跳び
記録１４２回
尚、なんかボヨンボヨンしてるのに負けた。

第五種目　ボール投げ
上に投げたボールを殴る事で記録は１０００ｍを超えた。
尚、∞を出されて負けた。

第六種目　上体起こし
鎧とベルトが邪魔になって４２回。
尚、普通に負けた。

第七種目　長座体前屈
普通にやって４１．４ｃｍ。
尚、普通に負けた。

第八種目　持久走
結果、バイクを出されて負けた。

その後、テストが終わり除籍はウソだと明かされ他のクラスメイトが安心していた中1人だけ5位というパッとしない順位にいた事に落ち込む者がいたとか・・・。